

虐げられた子どもたちの表象 —山田詠美『つみびと』(2019年)について—

花家彩子

こども健康学科

Representations of Abused Children: Amy Yamada, “Tsumibito” (2019)

Ayako HANAKE

要旨

本論の目的は、山田詠美による小説『つみびと』(中央公論社、2019年)が、実際に起きた虐待という事象に対してフィクションを通じてどのようなアプローチを達成したかを明らかにすることである。

『つみびと』という小説は、2010年に実際に起きた虐待事件に着想を得て書かれたことが明示されているが、ここには大幅な脚色と作家の想像力が注ぎ込まれており、創作されたフィクションとして読まれるべきものである。

『つみびと』には3人の重要な登場人物がいる。下田琴音、笹谷蓮音、桃太である。それぞれ、虐待事件の犯人の母親、虐待事件の犯人、そして虐待の結果死に至った子どもである。小説『つみびと』は、この三者それぞれの視点から、それぞれの事件までの生涯がどのようなものだったかを振り返る形で進行する。

調査や報道では、実質的には、犯人のそれまでの生い立ちしか明らかにされていない。しかし『つみびと』は、琴音に架空の物語を与え、言葉を話すには幼すぎる桃太に言葉を与えた。

架空の物語と言葉を与えるという作家の創造によって、小説『つみびと』は、虐待という社会的事象に対して、「逃げる」「何も考えずに耐える」という手段の危うさと「正しくなさ」、そして、死んでしまった桃太の持っていた「思考し、行動する」という手段の可能性を感じさせる。さらに、読者に対しては、読者自身が「共に思考し、行動する」にはどうすればいいかを考えさせる。このような虐待に対するアプローチは、フィクションにしか達成できないものである。

キーワード：虐待 山田詠美 フィクション 現代文学 言語発達

Abstract

The purpose of this paper is to clarify how the novel “Tsumibito” [Sinners] (2019) by Amy Yamada (1959-) achieves its approach to the actual event of child abuse through fiction.

The novel, “Tsumibito”, was explicitly inspired by an actual child abuse incident that occurred in 2010. Although, readers should read this as a fictional work because it is heavily adapted and imagined by the author.

There are three important characters in “Tsumibito”: Kotone Shimoda, Hasune Sasaya, and Momota. They are the mother of the abuser, the abuser, and the child who died of the abuse. The novel “Tsumibito” progresses from the perspective of each of these three people as they look back on what their lives were like before the incident.

The investigations and news reports have only revealed the background of the abuser. However, “Tsumibito” gave Kotone a fictional story and gave Momota a language even he was too young to talk.

Through the author's creation of giving a fictional story and language, the novel “Tsumibito” makes readers feel the danger and “incorrectness” of the means of “escape” and “enduring without thinking” against abuse, and the possibility of the means of “thinking and acting” that Momota given. Furthermore, it makes readers think about how we can “think and act together”. Creating Fiction only can achieve this kind of approach to child abuse.

Keywords : child abuse, Amy Yamada, fiction, modern literature, linguistic development

はじめに

本論の目的は、山田詠美による小説『つみびと』が、実際に起きた虐待という事象に対してフィクションを通じてどのようなアプローチを達成したかをあきらかにすることである。

結論を先取りして言えば、『つみびと』は読者に「虐待する／される『がわに立つ』」読書経験を提供する。これは虐待という社会的事象を報道するという立場から書かれる調査やルポルタージュ等においては達成され得ず、目指されもしない。「虐待する／される『がわに立つ』」読書経験を 제공하는ことは、読者の前に、虐待する／される人間をただの一人の人間として立ち現れさせることであり、読者は読書という美的な快樂とともに、ストーリーを追いながら、登場人物の人間的な価値を認めつつ、その行為に関心を寄せることになる。これは、客観的に見れば、虐待という社会的に糾弾されるべき行為に対しては持ち得ない感覚であるはずである。ただフィクションを楽しむという行為を通じてのみ達成されうる、虐待に対する関心の持ち方がここでは成立する。

本論が対象とする『つみびと』は、2018年3月26日から12月25日にかけて日本経済新聞紙上で連載され、2019年に中央公論社より単行本として出版された。本論では単行本でその内容を確認している。

山田詠美(1959-)は、1985年に『ベッドタイムアイズ』(河出書房新社)で文藝賞を受賞し小説家としてデビューした小説家である。その後複数回芥川賞の候補に挙げられ、1987年には『ソウル・ミュージック・ラバーズ・オンリー』(角川書店)で直木賞を受賞した。現在では芥川賞の選考委員をつとめている。

小説家・山田詠美を評するとき、その作品の多くが女性の性と恋愛を扱ってきたことがしばしば指摘される。しかし実は、その描写の対象はけっして「恋愛」「性」「大人の女性」だけではない。たしかに、初期の山田の作品は、特に80年代の女性の性の解放を謳ったフェミニズムの流行とも相まって、多くの女性読者から支持されてきたといえる²。一方で、『放課後の音符』(1989年、新潮社)や『ぼくは勉強ができない』(新潮社、1993年)では高校生の友人関係や生活、感覚を描き、また『風葬の教室』(河出書房新社、1988年)や『晩年の子供』(1991年、講談社)では少女の心情を描いている。1990年代の後半からは、山田の関心は時に社会的なテーマの中に位置づけられ、たとえば『MAGNET』(幻冬社、1999年)や『ジェントルマン』(講談社、2011年)では犯罪を犯す人間とその周囲の人間の心理を描いているし、『風味絶佳』(文藝春秋、2005年)に描かれた多くの肉体労働者はその労働環境とともに描写されている。

作家・山田の関心にはある程度の変遷があるが、山田の作品はそれらを安易に社会問題に帰着させようとするものにはけっして至らない。山田が描いてきたのは、個

人的な事情を抱えた個人のデリケートな心情と人間関係である。山田の作品の多くが恋愛を描いたのは、そこに究極の「個人的な事情」が存在するからである。一般的に考えればありふれた境遇にある個人も、その内実に丁寧に切り込めば、唯一無二の個人の物語が成立することを山田の作品は示してきた。そしてそのような個別の事情を抱えた個人と、その個人を取り巻く人間関係について、たとえそれが、恋愛関係、母と子、兄と妹、幼馴染など、その関係に簡単に名前をつけることのできる人間同士の関わりであっても、他人にはとても踏み込むことのできないような個別の事情が存在し得ることを、フィクションという方法を用いて描いてきたのである。

山田詠美という作家をこのように評価したとき、本論の扱う『つみびと』という小説は、単行本の末尾にあるように「実際の出来事に着想を得た」作品であるという点で山田にとっては初の試みではあるものの、書かれるべくして書かれた作品であるといえる。

1

『つみびと』は、2010年に大阪府で実際に起きた、二人の幼い子どもがマンションで餓死するという事件から着想を得て書かれたものであることが明示されている。この事件は、複数回の児童相談所への通報や、子どもたちの母親本人による児童扶養手当の申請(実際には手続き不備のため受理されず、支給もされなかった)があったにもかかわらず、二人の子どもの餓死に至るまで発覚しなかったこと、また、この母親が子どもたちの実父とは離婚しており、一人で二人の子どもの育児にあっていたが、子どもたちの死の直前まで友人や交際相手と遊んでいたことなどが発覚し、「母親になる能力も覚悟もなかった若いシングルマザーによる、前代未聞のむごたらしい虐待事件」としてセンセーショナルに報道された³。

この小説は、事件の発覚から約8年が経過した2018年に連載が始まった。この事件を扱った作品としては『つみびと』の他にも、杉山春によるルポルタージュ『ルポ 虐待-大阪二児置き去り死事件』(以下『ルポ』)⁴や、緒方貴臣による映画『子宮に沈める』⁵などがある。これらがどちらも2013年には公開されていることを鑑みれば、2018年の連載の開始は時代の要請に応えた速報性を備えたものとは言い難い。すなわち、これはあくまでも、作家によってかけるべき時間と想像力を注がれて創作されたフィクションとして読まれるべきものであり、同時に、読者に対しては、この物語が実際に起きたこととしてではなく、実際にあり得たかもしれない現実とは異なる物語として示された作品である。

『つみびと』には、実際にあった事件の「犯人」とされる女性をモデルとしていると容易に判別できる登場人物・笹谷蓮音と、母親にマンションに置き去りにされた結果、死に至った二人の幼い子ども・桃太と萌音が登場

する。彼らに関する描写にも十分な紙幅が割かれているが、むしろ『つみびと』という小説が想像力を注いでいるのは蓮音の母親・下田琴音である。いくつかの報道や『ルポ』において、「犯人」が幼少期に母親の家出を経験しており、幼い頃から家庭内ではほとんど母親の役割を果たさざるを得ない環境にあったことがあきらかにされている。しかし当然ながら、事件に直接関わりのないこの「犯人の母親」については、なぜ家出したのか、この母親がどのような人物なのかは示されていない。つまり、「犯人の母親」については、もちろん「犯人」についても子どもたちについても同様ではあるが、いくつかの設定は報道や『ルポ』と大きな矛盾のない形ではあるものの作家による創作である。創作によって、幼い頃に別離し、直接の関わりをほとんど持つことがなかったはずのこの母と娘に紙面上で関係を与え、まだ言葉をほとんど持たなかったはずの幼い子どもたちに言葉を与えることで『つみびと』は構成されている。すなわち、『つみびと』は、報道や調査では決してあきらかにされないことのない、死に至る虐待という起きてしまった事象を取り巻く母と娘、娘と子どもの関係と、それぞれの個人としての個別の事情に、想像力によってアプローチした小説なのである。

この点において、本論はあくまでも山田詠美の小説『つみびと』を論じようとするものである。すでに判決が出てから年月の経過した実際の事件を論じようとするものではなく、虐待という現実の事象の是非や策を論じようとするものでもない。ただ、この社会で共に生きる人間として、フィクションという想像力に何が可能かを示そうとするものである。

2

フィクションと現実の関わりについては、すでにいくつかの説得力のある論者が存在する。特に本論の立場からは、西村清和『フィクションの美学』（勁草書房、1993年）においてなされたいくつかの指摘をここで参照すべきである。

西村のここでの問題関心は「現実であればとうてい耐えがたいようなできごとさえ、フィクションであるというだけで、時に大きな快樂をもたらす」⁶のはなぜかということである。ここで西村は、特にフィクションに示される主人公が客観的に見ればならずである場合にも、読者はそのストーリーを追い、読書を通じて美的な快樂を得ることができるのはなぜかを問うている。

この問に対する西村の解答を端的に示せば、それは、フィクションの読者はフィクションを通してならず者の主人公に共感することができるからである。ここでの共感とは、「主人公との『同一化』や『感情移入』、『共同体験』や『追体験』を意味しない」⁷。ただ、主人公の「がわに立つ」ことになるということである。フィクション

における主人公とは、示されるストーリーの全体を見通すための特権的な視点の持ち主であり、フィクションの読者は否応なしに、主人公の立場からストーリーを追われることになる。この際、場合によっては、そこには登場人物の内面に関する描写が含まれ、このような内面については、実生活においては、自分自身についてしか知り得ない。にもかかわらず、登場人物の内面が描写されたフィクションを、特に、主人公の内面の示されたそれを受容する際には、読者はそこに一定の人間的な価値を認めながらストーリーを追うことが可能になる。フィクションに示される登場人物は、「現実のわれわれに似たあるタイプの人間ではあるが、われわれ個々人がそうであるように、あくまでも一人の個人として登場する」⁸。

すなわち、たとえフィクションに示された主人公が、客観的に見ればならず者であっても、その内面を知る読者にとっては、彼らは決してただのならず者ではない。読者は、このように一人の個人としてフィクションに登場するある人物の視点に寄り添いながらストーリーを追う。ストーリーを追うことについても、西村によれば、これは単純に「示される出来事や行動の連関を把握する」だけではない。このことについて、西村は以下のように論じている。

ストーリーを追うためには、たんにできごとや行動の連関を把握するだけでなく、登場人物たちの性格、そのつどの行動の意味や動機を、一貫性において推論し理解することが必要である。そして、これら性格や動機は、かれらがすむ世界における人物の身構え、つまりは一定の行動へのかたむきとしての信念に支えられている。しかも、それぞれの人物の行動や、それを支える信念にしても、まずはかれが帰属しそこで生きている世界という、全体的地平における行動の座標系に照らして、その都度理解され、評価されなければならない。⁹

ここでの信念とは、人物たちの行動に一貫性を与える思想や宗教、慣習や道徳などの、ある種の準拠であるが、次に示す、信念に関する西村の指摘は極めて示唆的である。西村は信念について以下のように指摘する。

舞台となる虚構世界は、時代や民族、文化や宗教など、しばしば読者や観客のそれと大きくことなっている。だが、わすれてはならないのは、それにしてもこの虚構世界は、人間の世界として、大枠において、われわれ読者の現実の世界と「似ている」という単純な事実である。そして、ストーリーを理解し追うためにも、むしろわれわれは、自分の信念を棚上げにするどころか、大枠において虚構世界の信念に似たわれわれ自身の信念を、よりどころにするほかはない。¹⁰

すなわち、フィクションを読むことは、読者が自身の生きる世界の信念を参照しながら、自身の信念に似た別の信念の世界に生きる個人の視点に寄り添い、ストーリーを追うことなのである。ストーリーを追う際には、読者は、登場人物の人間性と、行動の一貫性を認めるように努力することが要請される。もちろん、それらが認められた結果、読者は登場人物の信念に全く同意しなくても構わない。しかしそれは読者自身の信念を拠り所にして成立した読書経験の評価の結果である。

フィクションのストーリーを追うことによって、読者の想像力は、主人公の視点に寄り添い、主人公の生きる世界の信念やその行動の一貫性を理解する努力のために使われる。そして、その想像力の行使には美的な快楽が伴う。しかし、フィクションの物語は何か明確な結論を主張するものではない。ただ、物語だけである。そのようなフィクションに対して、読者は、フィクションの物語に描かれる出来事に関心を寄せ、能動的に想像力を行使する。そこで寄せられる関心は読者がそれぞれ個人的に持っている自身の信念と照らし合わされた個人的なものになるのである。

3

では、小説『つみびと』がフィクションとして何を創作したかを明確にするために、まずは着想を得た実際の事件がどのようなものだったかを、いくつかの報道と『ルポ』を参照して、必要な範囲で整理しておく。なお、報道、『ルポ』、『つみびと』においてそれぞれ呼称が異なること、2世代以上の親子関係が発生し記述が煩雑になることから、事件の「犯人」とされた女性をAと表記する。

事件の発覚は2010年の7月30日であった。事件のあったマンションの住人から、「ある部屋から異臭がする」という通報を受け、警察が当該の部屋を確認すると、部屋の中から一部白骨化した二人の幼い子どもの遺体が見つかった。死後一ヶ月ほど経っていた。

遺体が見つかったマンションは単身用で、一部の部屋は近くの風俗店の寮として使われていた。二人の子どもの母親・Aは、この風俗店に勤務する風俗嬢であった。Aは2010年の1月にこの風俗店の面接を受け、すぐに勤務を始めていた。面接では二人の子どものいるシングルマザーであることを話し、了解されていた。Aは当初、Aの勤務中、子どもたちをこの風俗店の紹介した託児所に預けていたが、この託児所の利用はすぐに辞めてしまい、その後はずっとマンションで留守番をさせていた。

2010年の2月頃には、マンションの部屋の中から「ママ」と叫ぶ泣き声が聞こえ始めており、3月30日には市の児童虐待ホットラインに通報が入った。通報を受け、職員が何度かマンションを訪ねているが、住民登録

がなかったことから本当に子どもが住んでいるのかさえ確認することができず、職員らはAにも子どもたちにも会うことができなかった¹¹。

同じ頃、Aはホストクラブで仕事のストレスを発散する、複数人の交際相手と遊ぶなどするようになっており、その華やかな様子をSNSに頻繁に公開するようになっていた。一方で、ホストクラブには約50万円の借金があったが、返すことができず逃げ回っていた。風俗嬢として勤めつつ、借金からは逃げ、交際相手の部屋で過ごし、たまにマンションに帰って子どもたちに食事を与え、子どもたちのいるリビングに外から粘着テープと南京錠で施錠してまた出かける状態が続いた。2010年6月9日にマンションに帰り、子どもたちに食事を与えたのを最後に、その後子どもたちの死が発覚するまで帰らなかった。

裁判の過程で、Aも幼少期にAの母親の家出を経験しており、ネグレクトと呼ぶべき生育環境にあったこと、中学時代に集団レイプの被害に遭っていたことがあきらかになった。心理鑑定を受け、「一種の自己催眠状態にあり、解離的認知操作という心理的対処の状態にあった」¹²ことが被告側から主張されたが、認められなかった。

Aは育児について親の援助を受けることができなかったのかを調査すると、Aの実父は一部の地域で有名なスポーツ部活の指導者であること、実父はAの実母との離婚後、やがて再婚した女性(Aにとっては継母にあたる)からは再婚した女性の連れ子と明確に差別されるという虐待を受けていたことがあきらかになった。

また、Aの離婚の際、二人の子どもの養育についての議論はほとんどなされなかったこと、むしろ、Aはこの時「責任を持って子どもを育てる、実家には頼らない」¹³という内容の誓約書を書かされていたことも判明した。

2010年の当時、ネグレクトという虐待があり得ることは社会的に認知されつつあったが、この事件に特異だったのは、Aが子どもたちをマンションに放置している間、「遊んでいた」と判断されたこと、また、その間もマンションからけっして遠くに離れなかったという点であった。

事件発覚直後の報道の多くは、この事件に対して、子どもを育てる覚悟のない若い女性(A)が、一時の恋愛の高揚感で妊娠・結婚したが、その結果離婚に至ってシングルマザーになり、結局育てられず、自分の欲求を優先して遊びまわり、むごたらしい形で二人もの子どもを死なせた、という物語を与えるものであった¹⁴。

この点に対して、事件を丹念に調査した『ルポ』は、Aだけが悪いわけではないことを主張するものになっている。『ルポ』において杉山は、

- Aもまたネグレクトという虐待、差別という虐待の被害者であること
- その結果、自分を大切に感じる感覚を持つことがないまま育ち、集団レイプにも遭っていて、解離性

人格症が認められるべきだったのではないかということ

- 行政の対応は、最前線で業務にあたる人々が精一杯の対応をしているとしても不十分であると言わざるを得ず、社会的な仕組みには問題があること
- 時代背景として「貧しいシングルマザー」が生まれやすくなった時期であり、他の現場でもあり得た事件だったのではないかということ

を指摘し、これは A という個人の人格を攻撃すべき事件ではなく、むしろこのような境遇にあっても、A はなんとかして「良い母親」であろうとしておいたのではないか、そしてこの「良い母親であろう」という意識が今も他の母親たちを責めている可能性があるのではないかと結論づけている。

4

では、この事件に着想を得て書かれた小説『つみびと』は、この事件にどのような創作の物語を与えたのだろうか。

『つみびと』は九章からなり、これにエピローグが付されている。

中心的な登場人物の相関は以下の通りである

- 下田琴音：A の実母
- 笹谷蓮音：A
- 桃太：A の実子。男の子。4 歳。
- 萌音：A の実子。女の子。3 歳。¹⁵

エピローグを除く九つの章はそれぞれさらに 3 つに分割されている。全ての章の 3 つの節が「〈母・琴音〉」「〈小さき者たち〉」「〈娘・蓮音〉」と題され、それぞれの立場から基本的には回想録の形での描写がなされる。〈小さき者たち〉に描かれているのは亡くなった二人の幼い子どもであるが、ここで描写の中心となるのは兄・桃太である。

〈母・琴音〉の節は、琴音の視点から一人称の文体で書かれ、事件が発覚し蓮音が逮捕された後、多くのメディアによって蓮音が「鬼母」として報道されている時点が現在として、琴音の生い立ちを回想していく。

〈小さき者たち〉の節は、桃太を中心とした三人称の文体で書かれ、桃太と萌音がマンションに放置され死んでしまう直前を現在として、桃太が物心ついてから現在まで母・蓮音とどのような時間を過ごしてきたかが回想される。

〈娘・蓮音〉の節は、蓮音を中心とした三人称の文体で書かれ、逮捕され刑務所に入った時点が現在として、蓮音の生い立ちが回想される。

すなわち、『つみびと』は A と当該の事件ではなく、琴音と蓮音という母と娘の生い立ちの物語を中心としながら、そこに死んでしまった二人の子どもに言葉を与える形で進行する。

娘・蓮音の物語

まず、A たる娘・蓮音にはどのような物語が与えられているだろうか。各章のプロットを回想内容に着目して整理すると、以下ようになる。

第一章 高校を卒業した蓮音にとって夫・音吉との出会いは初恋と呼べるものだった。地元の不良仲間からは手軽にセックスができる女として扱われていたが、それはいわば蓮音の生存戦略であり、拒否すべきと考える事象ではなかった。しかし音吉との出会いと恋愛は初めて自分が愛情を感じて他者と触れ合う経験となった。

第二章 小学校低学年の頃から、蓮音の母親は何度も家出を繰り返し、いつの間にか帰宅しなくなってしまった。母の不在の間、まだ幼い弟と妹の面倒はずっと蓮音が見ていた。父親は正義感に溢れ、厳しい人間で、仕事に夢中であった。この父親は家庭内で蓮音が弟妹の面倒を見ることに限界を感じていることには全く気づいていなかった。

第三章 夫と離婚し、風俗店に勤め始めた蓮音は、風俗店の主任・森山と出会い、理解を得る。当初こそ子どもを第一に考えた生活をしてきたが、徐々に疲れを感じ、交際相手との関係に逃げるようになってしまった。「逃げる」という人生の対処法について回顧する際に、自分の母親は「心の病」にかかって入院していたことを思い起こした。

第四章 音吉と恋愛関係になり、結婚・出産した当初は幸せだった。また、自分の父親・隆史が母親と離婚し別な女性と再婚した際は、蓮音はその女性とは全くうまくいかず、自分の鬱憤を晴らすためにこの女性を殴るなどしていた。

第五章 夫・音吉の母親は善人であり、子育てに関してはとても頼りになる女性であった。しかし、何かにつけて自分との格差を見せつけてくる人間でもあった。

第六章 蓮音は子育てに徐々に行き詰まるようになっており、まだ赤子の桃太を投げそうになることもあった。その都度、止めてくれるのは義母であったが、この義母との関係もけっして良好なものではなかった。

第七章 子育てに行き詰まるようになっていた蓮音は、桃太を寝かしつけた後、同年代の友人たちと夜な夜な出かけるようになった。夫・音吉は家を空け実家に入り浸りがちであった。けっして不仲なわけではなかったが、音吉が帰宅しないことに対しては不満だった。やがて、義母によって蓮音の夜遊びが露見した。

第八章 蓮音は音吉と離婚することになった。蓮音は音吉が最後まで母親の言いなりであることに不満をあらわにし、「キモイ」と吐き捨てた。離婚することになった蓮音は地元にいることができなくなり、東京に出ていくことにした。しかし、地元の友人たちに「裕福な嫁ぎ先を追い出された」と思われるのが堪らず、ブログに「銀座のホステスにスカウトされたので東京に行く」と書いた。

第九章 風俗店の面接で出会った森山は真摯な人間だった。地元を出てきた蓮音はここで生まれ変わろうと決心しており、森山に対して働く動機を「子どもたちに学資保険をかけたいから」と説明した。同僚にも恵まれたが、心の底から気を許せるとは思えず、一方で、同僚たちからの託児所の悪い評判については鶴呑みにし、託児所の利用をやめてしまった。やがて、ホスト遊びにはまり、心の中では子どもたちのことを常に思いながらも、どうしても帰宅することができなくなってしまった。

蓮音に起きた出来事の大筋は裁判や『ルポ』であきらかになったことと大きく変わらない。夫・音吉との恋愛が蓮音にとって極めて重要なものであったこと、それでも義母との関係や、結婚生活の端々に現れる音吉との格差に苦しみ、自分の人生に絶望してゆく心情が描かれている。

母・琴音の物語

では、報道や『ルポ』ではほとんど何もあきらかにされないAの実母・琴音についてはどうだろう。『つみびと』における創作の大半はこの琴音の物語に当てられる。『つみびと』において、琴音にはどのような物語が創作されたのだろうか。次に、母・琴音の各章のプロットを整理してみよう。

第一章 娘が幼い子ども二人を放置し餓死させたという事件が報道された時、琴音は44歳であり、60歳になる恋人・信次郎と暮らしていた。琴音には幼い頃から家出癖があった。なぜなら、琴音の父親は家庭内暴力を行使する男で、母親は常にこの父に殴られており、その様を見ること、母親が身を挺して自分を守ろうとすることが辛かったからである。母親はただ父の暴力に耐えるだけの人間だったが、折に触れて自分や兄に対して「産まなければよかった」と口にした。

第二章 5歳頃、琴音は父親を殺そうと試みたが、兄に止められた。琴音の叔母・類子は、自分の人生を引き合いに出しながら「逃げる」ことの正当性を琴音に仕込んだ。

第三章 琴音は耐えるだけの母親に嫌気がさしていた。琴音はこの頃すでに信次郎に出会っており、本音を話せる相手として大切にしていたが、信次郎とは彼の大学進学を機に会えなくなった。父親はある日突然心筋梗塞で倒れた。居合わせた琴音と兄は救急車を呼ばず、そのまま父親を見殺しにすることに成功した。

第四章 44歳の琴音は蓮音との関係を思う際に、自分が「子どもと他人になる」道を選んだのだと自覚する。琴音が中学生の頃、母親は自身の恋人・仲夫を家に住ませるようになった。仲夫には別に家庭があったが、完全に離婚してはおらず、平日は琴音の家に、週末は別な家に帰るような生活をしていた。このような仲夫の態度に、母親はやきもきしていた。琴音は、仲夫が母親と恋仲であるおかげで自分たちの生活が成り立っていること

を理解しており、なんとか仲夫に気に入られようとしていた。一方、兄は仲夫を嫌悪し、いい高校に進学しようと勉強に打ち込んでいた。

第五章 琴音は仲夫に取り入ることに成功し、納屋として使っていた部屋を自室とすること、ベッドを購入してもらうことに成功した。

第六章 仲夫は琴音の自室に入り浸り、琴音はやがて仲夫から性的虐待を受けるようになった。

第七章 仲夫からの性的虐待は継続していた。琴音は、この状況は自分が招いたことだと考えており直接仲夫を拒否できず、逃避の手段として精神を病んだふりとして自傷行為を始めた。やがて仲夫は琴音たちの家に帰って来なくなった。同じ頃、琴音は友人の弟のスポーツ大会の応援に付き合い、そこで笹谷隆史と出会って、一方的に恋慕した。

第八章 琴音は、笹谷と結婚し、出産し子育てをしていた頃は、満ち足りていて幸せだった。しかし三番目の子どもを産んでしばらくして、突然仲夫が夢に出るようになった。夢を見るのが恐ろしく、眠ることを拒否し始め、やがて自傷行為を再発した。たびたび家をあげ、他の男性と関係を持つようになり、家出した。

第九章 家出後、実家に連れ戻され、精神病院に入院し、実家と病院を行き来する生活が始まった。やがて、兄が迎えにやってきて、東京で一緒に暮らすようになる。兄には佐和という恋人がおり、仲良くなる。佐和の配慮と紹介で精神科のクリニックとつながりを持ち、カウンセリングを受け、琴音は「自分のことを語る」という術を手に入れる。佐和から「面倒を引き受けるのが身内であり、私たちはすでに身内である」「琴音は被害者である」という言葉を与えられる。琴音は自立することを目指して仕事を始め、きっかけを得て、地元に戻って信次郎の事業を手伝うようになる。

母と娘

蓮音の母・琴音に対して、蓮音にきわめて類似した生い立ちが与えられていることはあきらかである。

どちらも、権力的な態度をとる父親を持ち、母親は子ども達の前ではその権力に従っていた。両親は別離することになり、その後現れた血のつながらない新たな親からは虐待されていた。自身の身体および性を供することによって生存するという戦略を取り、それを自分の選択であると考えていた。結婚することになる相手とはこのような生存のために性を提供してきた相手とは異なる運命的な相手であったと感じており、結婚・出産を新たな人生の始まり、生まれ変わりの契機であると考えていた。しかしどちらも、出産をし、限定的な期間の子育てには向き合うものの、それを継続することには失敗してしまう。

夫との関係については、琴音の元夫・笹谷隆史は、自信に満ちた教育欲のある人物として描かれている。琴音

はこの隆史の自信と教育欲によって生まれ変わることができると感じて結婚し、その「生まれ変わった」という感覚によって子育てに向き合っていた。蓮音についてもまた、音吉との出会いは特別なもので、純情を伴った恋をし、「少女の時代をやり直す」（『つみびと』38頁。以下、『つみびと』からの引用は頁数を本文中に記載する）ことのできるものだった。音吉の家は資産家で、蓮音の義両親は住む家などの様々な援助を新婚の二人に与え、蓮音はそれまでとは比べものにならないほどの恵まれた生活を結婚によって与えられている。

しかし琴音の夫・隆史についても、蓮音の夫・音吉についても、恋愛、結婚の段階では魅力であった彼らの自信や生活習慣が、生活を共にする上でそれぞれの妻を苦しめ、結果として家から追い出すことになる。父親としての彼らも、それぞれの子どもを愛していないわけではなく、彼らなりの方法で愛情を注いでいるのであるが、その愛情は子どもたちに届いていなかった。

自分の身体については、琴音も蓮音も、自身の生存戦略として自らの性を利用して、という意識を持っていた。琴音については、自分たち家族の生活の基盤を支えてくれている母親の新しい恋人・伸夫を家に引き寄せおくために自ら伸夫に取り入っていた。蓮音については、「いないよりは良い」「少なくとも誰かに必要とされている実感を得」（151頁）るための相手として、蓮音の身体を弄ぶ地元の男友達を利用して、しかしどちらについても、心から望む関わりではなく、本当は拒否したいのだが拒否の術を奪われているだけであった。「蓮音は、強引に男の車に引き摺り込まれた訳ではなかった。乗れよ、という命令に従った」（41頁）のであったし、琴音もまた「私がいい気になっていたせいで、こんな事態を招いてしまった。私が悪いんだ。お母ちゃん、ごめんなさい。騒ぎ立てたら、この家は滅茶苦茶になってしまう」（239頁）と考えていた。

この二人が似ているのは血筋によるものである、ということが、作品全体を通して、様々な形で示される。すでに冒頭、事件について取材しようとする者たちが琴音を訪ね、不遜な態度で琴音から言葉を引き出そうとする場面では、記者たちは琴音が蓮音をおいて家出したことを指摘して、この行為が蓮音と同じ虐待行為であると琴音をなじっている（5-6頁）。また第四章では、元夫・隆史と連絡を取った際には、隆史から以下のように言われる。

「お前に似ちまったんだな、蓮音は。いや、似たなんてもんじゃない。血筋かもな。おまえも虐待受けて来た訳だし。でも、まさか、おれの血を分けた娘でもあんのに、あんなふうになって、取り返しの付かない事件を起こしてくれるとは」（124頁）

蓮音の方も、事件を起こす前、音吉と恋に落ち地元の

悪友たちの相手をしなくなった頃に、彼らから以下のような陰口を叩かれる。

「仕方ねえよ。だって、あいつんちって、代々恩知らずだって有名じゃん」

「あー、蓮音の母ちゃん、笹谷コーチのこと裏切って出てったんだよな」

「ひでえことするよ。おれも野球教わったけど笹谷コーチほど素っ晴らしい人、いねえべ？」

このように、全般を通して、表面上は、琴音と蓮音は「血筋」を引き受けた似たもの同士の母と娘として描かれていく。

5

「逃げる」母と「耐える」娘

きわめて類似したこの二人の異なる点として浮かび上がるのは、蓮音がこの「子育ての失敗」の帰結として二人の幼い子どもを死なせてしまうのに対して、琴音については、とりあえず蓮音は成人し、蓮音の弟妹にあたる勇太、彩花もほとんど登場しないが順調に生育したことが示されていることである。

琴音は第四章で元夫・隆史になじられながら、以下のように考える。

私も、娘の蓮音も、自分の子を捨てた。事実だけを取り上げれば、同じ残酷で非道な行いに思われる。でも、私は、後先を考えずに逃げ出したから、子供たちを死なさずにすんだ。そして、すべてを引き受けて来た蓮音の子供たちは死んでしまった。（125頁）

「逃げる」こと知っており、それを実行するか否か、という点が、琴音と蓮音の大きく異なった点である。この「逃げる」という概念を琴音に植え付けた大人として、琴音には叔母・類子という人物が与えられている。

類子は琴音の母の妹である。この類子は独身で、高校を卒業してから田舎を出て東京に行き、その後地元に戻ってきて喫茶店を開いているが、類子は『つみびと』という作品の中で唯一の「自由で開放された女」として設定されている。『つみびと』に登場する他の多くの人物たちは、家族や地縁など、皆何かに縛られており、琴音や蓮音が育った「地元」は、人間関係の密な閉鎖性の高い土地として描かれている。類子は、地元を出て一度東京に出ているという点ですでにこの地元では爪弾きにされているものの、家族を持たず、自分の好きなように喫茶店を運営しており、地元の若者たちの憧れの存在でもある。東京帰りの鼻持ちならない人間だと一部から思われているが、このことも類子はまったく気にすることがない。

地元の人間から陰口を言われている類子を心配する琴音の母に対する類子の反応を、琴音は以下のように回想する。

類子さんは一向に意に介さない。

「大丈夫、しがらみでがんじがらめになったら、また逃げ出せば良いだけの話」

逃げればいい、逃げたのよ、逃げちゃえば良かったんだ……類子さんは「逃げる」という言葉を、さまざまな場面に当てはめてよく使った。

……略……

私は、類子さんの言うことを聞き流すのが常だった。(略)しかし、時折、私の心を不意につかんで離さない言い回しや話の種などがあり、私は耳をそばだてた。

「逃げる」に関してはどうだったか。

具体的には覚えていないのだが、類子さんの使うその言葉は、あらゆる角度から私の内部に入り込んでいたのだと思う。(51頁)

琴音は自身が危機に陥ると「逃げる」人間だった。父親の暴力からは家出の形で逃げ、伸夫の性的虐待からは自傷行為と狂ったふりで逃げることができた。正義を振りかざす夫・隆史の圧迫感からも男遊びと家出で逃げ、子どもを愛することができないという恐れからも家出によって逃げたのである。

このように苦難からは「逃げる」ことのできる琴音に対して、蓮音に与えられた手段は「何も考えず耐える」ことであった。母・琴音が家出した後、幼い勇太と彩花の面倒を見なければならなくなった時も、好きでもない、ただ自身の性欲を満たすことにしか関心のない男友達に弄ばれる際も、蓮音はただ耐えていた。しかし、ただ何も考えずに耐えるというこの方法は、当初こそ奏功していたものの、蓮音は、音吉という恋の相手を得たときに、他の男に犯されながら涙を流し、桃太と萌音を愛し大切に育てたいと感じたときに、その面倒を見るという苦難に対しては「何も考えずに耐える」ことができなくなっている。

では、この母と娘については、琴音の「逃げる」という手段の方が苦難に対する正しい選択だったということなのだろうか。

蓮音は、音吉と離婚するまでは与えられた苦難に「耐えて」いるのであるが、子どもたちの面倒を見なければならぬのに、良い母親でいられないという自分自身には耐えられず、これを考えないようにするために、マンションに帰ることができない間、ひたすら交際相手や友人と遊び、フェイクのきらびやかな生活を演出するようになる。それまでどんなに周囲から見くびられ、親や元夫から見捨てられても、「ばかやろう」「ふざけんな」と吐き捨てて耐えてきた蓮音は、夫と離婚して地元から出

るとき、マンションに子どもたちを置いて出るときには、苦難から「逃げて」いる。しかし蓮音の「逃げる」という選択は蓮音を破滅に導く。

この「逃げる」という手段について、第八章で琴音はこのように考える。

思えば、私の人生は、逃げることの連続だった。人間や場所やしがらみなどから、逃げて逃げて、その内に逃げたかったのは自分自身からだということに気付いた。だから、逃がしてやった。自分から、自分を。そうなると解放感が立ち込めて、何をしても平気になった。自分をいくら傷付けようと、他人がどれほど傷付こうと知ったことじゃなくなったのだ。楽になった。けれど、それは背後にある苦しみと常にセットになっていて、またすぐに、どうしようもない焦りが追いかけてくる。その繰り返しなのだ。(280-281頁)

琴音の方は、それまでさまざまなものから逃げるのができたが、自身の過去からは逃げられないということに第八章で気づく。それまでの「逃げる」という方法は、常に一時的なもので、成長とともに巧妙なものにはなかったが、それらは「正しいとは言えないやり方」(285頁)だったのである。限定的な期間に限り子育てを成立させてくれた子どもたちの可愛ささえ、琴音にまわりついた過去から逃げるための一時的な手段だった。

つまり、「逃げる」という手段は、けっして正しい選択ではない。一時的な救済にはなるが、『つみびと』はこれを根本的な解決の手段として描いていないのである。

では、蓮音に与えられた「何も考えず耐える」という手段はどうか。

琴音の家出後、家に残された長子であった蓮音は、自身もまだ幼いにもかかわらず、さらに幼い弟妹の面倒を見ていた。蓮音は自身の子どもである桃太と萌音の面倒を見続けられないのであるが、弟妹の面倒を見ることができたのは、これを自身に与えられた苦難として、ただ「何も考えずに耐えて」いたからである。実質的に蓮音が育てた弟妹・勇太と彩花は、『つみびと』にはほとんど登場しない。そして、勇太と彩花を育てたようには、桃太と萌音を育てることができなかった。このことについて蓮音は以下のように自覚している。

昔、自分の幼ない弟と妹を面倒見た時のことを思い出して、必死に世話をしたが、あの時とは何か違っていった。母の琴音の不在中に死に物狂いになったようには、がんばれないのだ。自分の産んだ子たちだというのに。一度、甘い味を知ってしまったからだ、と蓮音は思った。音吉にたっぷりと愛されたせいで、私は腑抜けになっちゃった。(185頁)

蓮音にとって音吉との出会いや恋愛、セックスは、それまでの自身に与えられることのない愛情を伴うものだった。共に生活する中では、ときに義母との関係や生活習慣の違いに苦しめられることがあるものの、基本的には蓮音は音吉を愛し続けている。そして、音吉との間にできた子どもである桃太と萌音に対しても、彼らが蓮音の立場から回想される際には、けっして邪魔で憎らしい存在として描かれることがない。音吉と離婚する前、子育てに行き詰まって桃太を投げそうになっている時でさえ、蓮音はこれを義母が止めてくれた、と感じている。蓮音は音吉のことも、桃太と萌音のことも、愛しているのである。

しかし蓮音に愛という感情を与える事象に、自身が十分に応えられない場合に、蓮音はこれに耐えることができない。何も考えないでいられないからである。実家に入り浸りがちで帰宅頻度の低くなった音吉に対しては、この事実を耐えることができず地元の友人たちとの関係を復活させ遊びに出かけるようになってしまい、愛おしく大切にしたいにもかかわらず、あまりにも手がかかり自身が十分に応えられない桃太と萌音の子育てに対しては、このことについて考えないようにするためにホストクラブや交際相手との遊びに時間を割くようになる。

すなわち、蓮音に与えられた「何も考えずに耐える」という手段も、万能なものではない。蓮音に感情を与え、何かを考えさせてくる事柄については、蓮音は耐えることができない。

「思考し、行動する」桃太

実は、この「逃げる」「何も考えずに耐える」という二人の苦難への対処法の限界についても、この二人の類似を指摘することができる。

琴音はあらゆる苦難から「逃げて」きたのであるが、自分自身の過去から逃げるができなかった。これまで自分の中に隠蔽し忘れるように努めてきた過去の事象が、ある日突然琴音に襲いかかり、琴音はこのことから逃れることができない。蓮音もまた、あらゆる苦難に対して「何も考えずに耐えて」きたのであるが、愛を知り、自分に何らかの感情を与えてくる事柄については、何も考えずにはいられないし、考えてしまう自分自身には、耐えることができない。すなわち、二人とも、自分からは逃げられないし、自分には耐えられないのである。

第八章で、琴音は子育ての最中、自分が夢によって過去から追われ始めていたときに、蓮音から心配されたことに対して以下のように答えていた。

「ごめんね、蓮音。ママ、お母さんなのに、ちゃんとしてないね。これから気をつけるね」

そう言って安心させようとするのだが、蓮音も、そして、私自身もまたくり返すに違いないと予想している。私は震える娘に、言う。

「蓮音は、絶対に、ママみたいに逃げちゃいけないよ」(286頁)

「何も考えず耐える」ことを蓮音に植え付けたのは、他ならぬ母・琴音であった。

では、どうすることもできないのか。〈小さき者たち〉に描かれた4歳の少年・桃太はどうだろう。

実際に起きた事件を思い起こせば、死んでしまった二人の子どもたちは完全に被害者である。抵抗する手段も、訴える言葉も持たない子どもたちは、どのような形であれ、絶対に守られるべき存在である。このことは疑いのない前提として、しかし、『つみびと』が桃太をただ守られるべきだった存在としては描いていない。

『つみびと』は、まだ桃太が赤ん坊であった頃から、フィクションの想像力によって桃太に言葉を与える。第一章では、一方的に母親を罵る父に対して、桃太は以下のように考える。

嫌だな、と桃太は熱に浮かされながら考えていました。母との満ち足りた時間を、いつも誰かしらが邪魔しようとする。まだ言葉にして抗議することのできない桃太でしたが、感じ取ることは可能だったので。それを、むずがるというやり方で、どうにか伝えようとするのでした。

「ほら、桃太、嫌がって泣いてんだろ」

そうではなかったのです。嫌がってなんか、ない。桃太は自分の母親を罵る者たちを押しつけたくて泣いていたのです。(26-27頁)

桃太の思い出す母は優しく、愛に溢れている。母は桃太に言葉を与え、思考する力を与える。たとえば、以下のように。

「じゃ、ママががんばるように、モモは、フレーフレーって言わなきゃいけないよ」

「それ、どういう意味？」

「運動会とかで、駆けっこやるじゃない？ その応援でおっきい声で叫ぶんだよ。フレー！ フレー！ 負けんなって」(63頁)

「ママ、ぼくとモモのこと、ずっと飼ってくれる？」

は？ と言ったきり母は立ち尽くしています。

「飼ってください。お願いします」

桃太は深々とおじぎをしました。桃太がゆっくりと頭を上げると、そこには困惑し切ったような表情で母が彼を見下ろしていました。

「モモ、言葉の使い方、間違ってるから。今のうちに直しときな。飼うっていうのはペットに使う言葉だから。人間の子供には使わないの」

「そうなの？」

「そうだよ。ママは、あんたたちを飼っている訳じゃない。育ててるんだから。解る？」(219-220頁)

思考する力を持った桃太は、守られるべき者ではなく、むしろいつでも母や妹を守ろうとしていた。赤子の頃から、母が虐げられないようにむずがり、必死で働いてストレスを溜めている母を応援したり、背中を撫でたり、抱きしめられながら抱きしめていたりする。妹・萌音に対しても、母の置いていったコンビニ食を食べられるようにしてやろうとし、弱っていくのを心配して世話をやり、それらがうまくいかないことに悔しがらる。

桃太は、自分が理不尽な境遇に置かれていることをわかっているが、そのことを周囲のせいにはしない。桃太は、与えられた苦難や理不尽に対して、思考する力を使って「自分にできることや改善できることはないか？」と考え、行動する。

母に対して、寂しがっているようであれば、自分がしてもらって嬉しかった、背中を撫でる、抱きしめるといった行動を実際にするし、母は動物が好きらしいことを知れば動物のように振る舞ってみたり、母が宝石が好きらしいことを知れば、それらしいものを見つけた時は獲得しようとする。そして、その行為の結果が母を怒らせたり、悲しませたりすれば、それがなぜだったのか？ 次はどうすれば良いか？ を思考する。

もちろん、桃太のそれらの試みは、蓮音にとっては幼い子どもの鬱陶しい行為であり、同時に本当は愛して大切にしたい桃太の行動であることを思い起こさせて蓮音を苦しめているのであるが、桃太の立場からは、これらは母を絶望させるたくさんのものから母を守ろうとする抵抗の手段である。

母が桃太に与えた言葉の一つに「メゲラ」がある。「メゲラ」とは、蓮音を絶望させ、めげさせる全てのものの総称であり、退治すべき怪獣である。桃太は、このメゲラを退治することを自分の役目として「思考し、行動する」という方法でメゲラと戦う。死の直前に与えられた苦難である飢えや渇きに対してでさえ、最後まで絶望にめげることなく、蛇口に手を届ける方法を考える、冷蔵庫のコンセントを入れようとする、などの「思考し、行動する」という手段で戦い続けるのである。

6

この桃太という名前は昔話の桃太郎から取られた名前である。蓮音は桃太郎の物語を桃太に読んでやり、「格好いいべ？」(22頁)と語る。桃太は桃太郎の物語を引き受けて、母を守るために絶望というメゲラと戦う。

『つみびと』における桃太は、放置され、飢えて死んでしまう。桃太は哀れであるが、強く、たくましい。しかし桃太に与えられた「思考し、行動する」という手段は、この手段を行使する桃太があまりにも幼かったため

に真価は発揮されず、桃太の人生は終わってしまう。桃太が哀れであるのは、母に愛されなかったからではなく、「思考し、行動する」という手段を使いこなすには、桃太はあまりにも幼すぎたからである。蓮音は桃太のことを愛していて、桃太はそのことを知っていた。

しかしここで昔話の桃太郎を思い起こせば、鬼を退治する桃太郎でさえ、一人では戦わなかったことが想起される。桃太郎は、生まれ育った家で得たきびだんごを持って出かける。そしてそのきびだんごを、自分の餓えを解消するために使うのではなく、仲間を獲得するために使う。仲間を得て、共に鬼と戦ったのだった。一方桃太は、ずっと一人で戦っていた。

『つみびと』の終盤、第九章で、琴音の人生は大きく展開する。実家と精神病院を行ったり来たりする生活をしてきた琴音を、東京から兄が迎えにくるのである。精神的にも経済的にも自立した兄のもとで穏やかな生活を送りながら、琴音は兄の恋人・佐和に出会う。

佐和との出会いが、琴音に過去と向き合い、自分のことについて語る術を与えることになるのだが、佐和の身内に対する考え方は、それまでに『つみびと』に登場するどの人物とも異なっている。自分について語ることを覚え、佐和に対しては兄にも話せない性的虐待の経験についても話せるようになってから、琴音は、琴音のこの行為が佐和にとって鬱陶しいものではないかと確認する。その確認に対して、佐和は以下のように答える。

「うっとうしくない人間なんて、この世にいないのよ、琴音ちゃん」

「そうなの？」

「そう！ でもね、いいこと教えてあげる。そのうっとうしさがなくなったら寂しいって感じられる人を身内って呼ぶの。琴音ちゃん、あんたは、もう私の身内だよ」(325頁)

佐和という身内を得て、琴音は第九章においてやっと癒され、逃げ続けていた自身の過去と対峙し、自らの意思で兄の元を出てゆくことができた。

つまり琴音が自分自身の過去という敵と戦うことができたのは、佐和という仲間を獲得したからである。琴音にとって佐和は、この二人に友人関係がないわけではないが、あくまでも兄の恋人である。兄と佐和はのちに結婚するが、琴音にとっては血のつながりのない、ただの身内である。しかしこの身内というのは、佐和の言葉を用いれば「うっとうしい」が「いなければ寂しい」存在であり、傷ついて困っていたら「手当てしてやる」(327頁)と思える存在なのである。

同じ第九章で、蓮音は逮捕される。第九章で蓮音は罪の意識に苛まれながら、母・琴音を思って泣く。蓮音は心の中ではずっと桃太と萌音のことを考えているが、蓮音の友人たちや交際相手は蓮音の心情が危機的な状況に

あることを一向に気にすることなく、蓮音を遊びに連れ出す。

第九章で蓮音が思い出しているのは勤務する風俗店の主任・森山のことである。森山は真摯で、「どの女の子にも分け隔てなく丁寧に接し」(343頁)、親切だが、プライベートに土足で踏み込むようなことをしない男であった。しかし、この頃蓮音の周囲にいた人間たちの中で唯一、蓮音の子どもたちのことを心配する人間でもあった。

蓮音が警察に行くとき、付き添ったのはこの森山だった。俺と一緒に警察に行き、という森山に対して、蓮音は「解った、じゃあ友達になってくれる？」(361頁)と答えた。蓮音もまた、森山という仲間を得て、桃太と萌音を育てられなかったという事実と向き合う契機を与えられるのである。

おわりに

虐待に関する調査や報道は、今でこそ一方的に親を責めるのではなく、どうすれば子どもを救えたか、そのためにどのような社会的な仕組みが必要かを論じようとするものになりつつある。しかし2013年にすでに『ルポ』が指摘しているように、社会的な仕組みを充実させることにも限界があり、そのための予算も限られている。その事実を目を瞑ったまま、仕組みの不備を指摘し続けることには限界があるだろう。もちろん、仕組みの充実も、専門家の知恵や知識、技術も必要不可欠であることは言うまでもないことである。

『つみびと』に描かれた物語は、確かに事実と大きな齟齬がないように構成されている。しかしこの『つみびと』というフィクションは、琴音の、蓮音の、そして桃太の、それぞれの個人の内部に想像力を働かせる。この想像力は物語を大きく脚色しながら、事実として報道された事柄と結びつき、「実際にはないが、あり得たかもしれない架空の物語」となっている。読者は描かれるそれぞれの個人の「がわに立ち」、ストーリーを追いながら、美的な快楽とともに描かれる出来事に関心を寄せることができる。この関心は、ただ虐待という忌避されるべき社会問題に対して持たれる、一般化された関心とは異なる、読者による能動的かつ個人的なものである。

フィクションによってもたらされる快楽は決して現実に関与することを指すものではない。そのため、『つみびと』の読書経験の議論としては以上で終えるべきである。しかし読者がそれぞれ個人として関心を持つことができるという主張のために、最後に、個人としての筆者の想像力のたどり着いた、『つみびと』というフィクションからもたらされた結論を示しておきたい。

この架空の物語は、虐待という、実際に起き、今後も起きうる、対抗するべき苦難に対するときの「逃げる」「何も考えずに耐える」という手段の危うさと「正しくなさ」、そして、死んでしまった桃太の持っていた「思

考し、行動する」という手段の可能性を感じさせる。そしてこの「思考し、行動する」という手段の可能性の先に、琴音の兄や佐和、森山のような、身内として共にある人間の重要性を読者に示す。兄も、佐和も、そして森山も、決して超人ではなく、人格者でもない。ごく普通の、ありふれた一般人として描かれている。琴音、蓮音とも、決して強固で親密な人間関係を結んでいるわけでもない。ただ彼らのしたことは、琴音、蓮音と、ごく限定的な期間において「共に思考し、行動した」だけなのである。

しかしこの「共に思考し、行動する」という彼らの行為は、エピローグにおいて、初めて琴音と蓮音を向き合わせる。エピローグは、〈母・琴音〉という節で作られているものの、それまでと異なり、琴音を中心とした三人称視点となっている。この文体は意図的にそれまでの琴音と蓮音を重ね合わせるものである。琴音は5年もの間、蓮音のいる刑務所に通い続けるが、蓮音は体調不良など何かと理由をつけて琴音の面会を断り続けていた。やっと面会が叶ったときの様子は以下のように書かれる。

刑務官に促されて入ってきた琴音は、殺風景な壁に掛けられたカレンダーに目をやった後、ゆっくりと椅子に腰を下ろした。そして、表情を変えずに琴音を見ている。それとも、鏡のようなガラスに映る自分だけを見ているのか。(365-366頁)

鏡を見ているのは琴音なのか、それとも蓮音なのだろうか。しかしこの直後、琴音は蓮音の名を叫びながら、「このガラスは鏡なんかじゃない」(366頁)ことを確信する。意図的に類似する二人として描かれてきた琴音と蓮音は、別の人間なのである。

二人が別の人間として対峙し、「幸せ」を共有することでこの架空の物語は終わる。この「幸せ」の共有の先に何がありうるか。この先を『つみびと』が描かなくても、『つみびと』というフィクションを通して「共に思考し、行動する」という手段の可能性を知った読者は、自らが「共に思考し、行動する」という手段を行使すべきだった機会を逃していなかったか、これから逃さないようにするためにどうすればいいか、折に触れて考えることになるだろう。『つみびと』はフィクションである。しかしフィクションにしかできない方法で、虐待という怪物と戦う手段をわたしたちに与えているのである。

¹ 山田詠美『つみびと』中央公論社、2019年。

² 現在作家として活躍している綿谷りさや金原ひとみも影響を受けた作家として山田の名前を挙げている。

³ この事件の裁判は最高裁まで及んだが、この上告は棄却された。2013年に、この母親の刑事責任能力に問

題はなく、このまま子どもたちを放置すれば死んでしまふであろうことは認識できた、つまり未必の殺意があったものとして30年の懲役が確定している。

⁴ 杉山春『ルポ 虐待 -大阪二児置き去り死事件』ちくま書房新書、2013年。

⁵ 緒方貴臣監督『子宮に沈める』配給・アルバトロス 2013年。

⁶ 西村清和『フィクションの美学』勁草書房、1993年、1頁。

⁷ 同上、120頁。

⁸ 同上、133頁。

⁹ 同上、128頁。

¹⁰ 同上、129-130頁。

¹¹ 『ルポ』においては、この児童相談所の対応はけっして怠惰なものではなく、最大限可能なアプローチを試みていたことが強調されている。

¹² 『ルポ』 84頁。

¹³ この誓約書の内容は『ルポ』 185頁で確認できる。

¹⁴ たとえば週刊朝日「ゴミ部屋にわが子を閉じこめた風俗嬢ママ 大阪・2児遺棄事件」2010年8月20日発行、134頁など。

¹⁵ 報道によれば、亡くなった二人の子どもは姉弟で、それぞれ3歳と1歳であった。